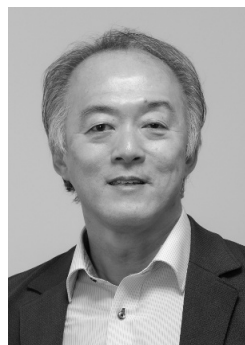




「檄」から考える春闘と賃金



労働組合や共闘運動でよく使われる「檄」という言葉。闘争時に「檄布」を送ることも通例だ。ただ、「檄を飛ばす」という言葉の使い方には注意が必要で、辞典では「人々を急いで呼び集める。自分の主張や考えを広く人々に知らせて同意を求める」とされ、誤用の例として「頑張るよう激励するように用いられることもある」が挙げられている。文化庁調査でも、本来の意味を選んだ人は22・1%で、「元氣のない人に刺激を与えて活気づける」を選んだ人は67・4%。古代中国で招集または説論のための文書「檄」と、激励の「激」が似ているゆえの誤用との推察だ。

ここでごよぎるのが「春闘」。政府が企業に賃上げを請する官製春闘や、失われた30年と言われる賃金水準低迷と今も続く実質賃金の低下のなか、ニュ

ースや新聞に躍る「一発満額回答」、「組合要求以上の回答」の文字を労働者はどう理解したのか。現在雇用労働者6139万人のうち労働組合加入は991万人（約16%）と過去最低を更新、労働組合がある企業とそうでない企業の賃上げ幅の差も過去最大を更新、ベアの実施も労働組合あり71%に対して、ない企業は44・8%と歴然だ。

連合は「組織率の低下は、集团的労使関係に守られない労働者が増加し続けていることを示しており、強い危機感を持たなければならない」としているが、政府や財界の要請でも景気や物価動向でもない、「賃金は労働力の再生産費」という本質を腹に据えて「春闘」の意味を間違えないようにしたい。

労働大学企画編集委員 細田 博樹